

逆 光 線

逆光線

1956年7月25日 第1版刊行

著 者 岩 橋 邦 枝
い わ は し く に え

刊行者 竹内 富子

定 価 250円
地 方 価 260円

株 式 三 笠 書 房
會 社

東京都千代田区神田神保町二丁目
電話九段區 6504 振替東京 22096
7483

© Kunié Iwabashi, 1956. Printed in Japan

堀内印刷 • 徳住製本

逆 光 線

岩 橋 邦 枝



三 笠 書 房

目次

逆光線	五
熱帶樹	三
六・三・三・X・四	三
つちくれ	一三
糶がら	一四九
富豪家族	一五
不参加	一九三
あとがき	二四二

裴
幀

藤
岡
光
一

逆光線

正面玄関の石段で、Y女子大学の本年度入学生が記念撮影をしている。新入生達は殆んど皆、重い紺か黒のスーツ姿だった。その群を横切つて来る黄色いカーディガンの上級生が、研究室の窓から見物している宮島の眼にひどく潑刺してみえた。

ノックする音がして、研究室の入口にさつきの黄色いカーディガンがすらつと立つていた。

「テキストの第一章が出来上りましたので」

黄色いカーディガンは真顔で眼を睜るようにして云うと、宮島の前に領収証の紙片をつき出した。

「原紙は一枚十円で、二十枚買いました。そのうち四枚しくじつたので、四十円だけペイから差引いて下さい」

漸く宮島に、話の筋が掴めた。助手に頼んでおいたプリントのアルバイトを、助手が忙しいか何かでこの学生に廻したのだろう。そこ迄考えて、宮島は軽く顔を顰めた。

「この間隣りでタイプを打つたのは、あれは君？」

「はい」

宮島は慌てて学生の手からプリントの用紙を一枚抜き取つてみたが、彼の予想に反して、紙面には針金細工のような横文字が清潔に並んでいた。

先日、威勢のよい発音がしたと思うと衝立越しに実のんびりしたタイプライターの音が始まつたのだ。ポチッ、ポチッ、聞いている方で苛々してくる。いつときしんとして、突然またポチッとくる。しまいには、宮島はポチッが途切れると自分の眼も釘づけになつて先の活字へ移らなくなる始末で、忽々に本を閉じて引揚げた。出しな、真直ぐの髪をたてがみのように首筋で切り揃えた黄色い後姿を見た。

「あのポツツン、ポツツンで原紙十枚は努力賞ものだな」

「はい。それで、この分のペイを今すぐ頂くこと出来ますでしょうか」
矢張り真顔である。

ペイを貰うと上眼使いに暗算して正確にお釣を返し一礼してから、初めて紀野繁子は首をすくめて笑つた。

「大助かり。目下、大ピンチで今月の子供会のカンパも出来ずにいたんです」

夜だけ酒場でアルバイトをしているセツルメントの仲間の所へ、今日早速この金を届けに行くという話を聞いているうちに、宮島も其処へ従いて行つてみる氣になつた。二晩続きの徹夜の後では、どうせ今夜は仕事にならない。

「でも、先生みたいな通のお方がいらつしやるようなお店ではないんですよ」

街路樹の芽のあおくヒかつている下を一步一步背伸びするようにして歩きながら、黄色いカーディ

ガンはしきりに念を押した。睡眠不足の眼に午後のきらめきは少しきつ過ぎて宮島は、敷石を数えるような猫背で歩いた。

二人は宮島のいきつけの珈琲店で夕方迄の時間を潰すことにした。

「君とは、いつか一度喋ったことがありますね」

「ええ、『有名人』論議」

紀野繁子も、その時のことはまだ憶えている。三年になる迄は専門学科の講義が無いから、繁子は週一度の合併講義を後の方の席で聴く以外に宮島教授と顔を合わせる機会は無かった。繁子が宮島と個人的にやりとりを交わしたのは、過去二年間、あとにも先にもあの時一度きりだった。

あの時、宮島の愛読者と称するベレー帽の女性が勇ましくまくしたて、揚句宮島にサインを求めて出て行つた後で繁子は「先生すてきだ」と云つた。矢張この珈琲店で、だ。聞くなり、一緒にいたクラスメートのFは甲高く笑い出した。宮島も頬をさすりながら苦笑した。繁子は心外で「あら皮肉では無しによ」と躍起になつた。「他人に無視されない事が何よりだと思ひますもの。人にかまわれることは素敵だわ。お世辞やおべつかで構わない。どうせ他人の氣持なんて、お世辞と真物の境い目は判りませんもの。云つてる当人にさえ。有名であるという事は素晴らしいことですわ。世間の評判や喝采が一番確実なものだという氣がするんです。先生のこと羨ましいですわ。先生のような『有名人』はいつも生きていられるという充実感がありだと思ふと」すると宮島は一寸氣障つぽく嗤つて「虚名ですよ」ブツンと云つた。

「虚名と実名の区別つて？ それ、先生の自己判断に依るものでしょう。自己判断なんて結局ひと

りよがりの自己満足。あてにならない。無意味。客観的判断こそ真物だと思います」「エヘン。客観の存在が自己の存在を証明するのであります」とFが横からまぜつかえした。宮島の氣乗薄の鈍い眼差にぶつかると繁子は、アホらしくなつて喋るのをやめた。「それから」「それだけです。もう宜しいんです」声をたてずに宮島は長いこと笑つてから、一寸改まつた顔になつて「君の云う『人にかまわれる』つて点では僕はもう不足ありません。ですがねえ、僕の学者としての仕事を本当に理解してくれている人はその中の何パーセントかで、あとはもう、人につられ宣伝につられ」、そこで宮島は最近ある婦人雑誌に依頼されてちよつとしたものを書いたところ忽ち離婚や恋占いの身上相談の手紙がワンサときた話をした。「よもや、宮島咲なる男が心理学者だとは思つとらんでしょうね」とわらつた。「僕は、僕の学者としての仕事に対して批判や激励を送つてくれる先輩友人を信じたいな。彼らの判断が実名というものですよ。でも、どうやら最近の僕は実名芳しからずですがね」と又わらう。「先生、本当に虚名がお嫌いなのかしら。ほんと、オに」繁子が顎をひき力んで念を押すと幼稚園の児のようになつた。「ああ本当に」「嘘。人にかまわれて、嬉しくない人なんていませんわ」「そりや。嬉しくないことはないですよ」「そろそろんなさい。じやほかに云うこと無いでしょうに。得意な事や嬉しい事なんか、ありふれた人間にはさらに起こることではありませんわ。有名人の特権だわ。なにも、先生の御本を読んでいなかつたり心理学者としての宮島咲氏を知らないからといつてその人の先生に対する関心の質が、先生が実名の作り手にしておられる学者仲間のより低いとは絶対に云えないと思うんです。兎に角、質とか中身の詮索が問題ではなくて、大事なのはうわべの事実だけです。真の理解者なんて、決めてみても仕様がなしでしょう」繁子はあの時、こんなふうにも云つたものだ。

「あの時はわたし、随分ダベりましたね。時々、発作的にああなります」

「打てもしないタイプを引受けたのも、発作的ではなかったの」

「あら、殆んどミス無しで打ちましたわ」

繁子は心外そうに眼を挙げた。ついでに、この真昼間薄暗い店内にまのびのした顔を並べてでれつとされている大の男たちを見廻してから、鼻にちいさく皺を寄せて宮島に笑いかけた。

「みなさん、インテリなんですわね」

「インテリ」

宮島は鸚鵡返しに大きな声をして、あははと笑った。この意気投合が繁子を気楽にした。宮島が何かの拍子に首を振ると、斜め後の方角から見ると息子の文夫は気の毒な位似ていた。

「先生の御長男の方、いい絵をお描きになりますのね」

云つて、繁子は思わず片頬に掌を当てた。文夫が聞いたらどんな顔をするだろう。

Y女子大の演劇部の公演の時装置作りの応援にくるQ大生の中に宮島文夫もいた。繁子は、友達にくつついて仕事の見物に行つているうちにじき皆とも仲良くなつたが皆が雑談している時も文夫は独り肘迄まみれてせつせと塗料を溶いていた。そういう彼を、繁子たちY女子大生は「自意識過剰ね」とおどけた目くばせで舌を出したりしていた。繁子より一年下。宮島文夫の一種傲慢な無関心が繁子の神経を突つた。「オールド硬派よ。類稀れなる純情青年よ」と演劇部員のFが執り成すように云つた。それからそるような顎で笑つて附け加えた。「彼、ユーに関心をお持ちでございますのよ。トライすれば」繁子はトライした。現在、繁子と文夫は仲間の間では公認のリーベ同志ということになつ

ている。

息子の話になつても、宮島のたるんだ表情は格別の変化もみせなかつた。これから行く店にいる子供会の学生は宮島文夫の先輩だと繁子が教えても、気が無さそうにはあはあと云つていた。

さつきからスクンスクンと空転していたレコードが、替つてドビュッシイのピアノ曲を奏で始めた。繁子は去年来日した仏蘭西のピアノストの演奏会でこの曲を聴いたことがある。まだ少年といつてよい程若々しいそのピアノストの陶酔しきつた瞑目の表情とやわらかく澄んだピアノの音色は、眩しく輝いていた金髪的印象と共に不思議な新鮮さでまだ繁子の中に残つてゐる。ピアノストは、一曲弾き終る度に椅子から離れ優等生のような几帳面な御辞儀で聴衆の拍子に応えた。それを今繁子は想ひ出した。宮島の顔に眼を置いた儘ふつと微笑んだ。すると宮島が、なに？ というふうにつむる眼で微笑み返したのだ。繁子は狼狽した。もう一度、今度は宮島教授に向けて、胸をすぼめ念入りに微笑した。それから急に腕を伸ばして宮島のスプリングコートの上から二番目の釦を引張つた。だが、首を垂れている釦は意外に頑固にへばりついてゐた。

「失くならないうちにと思つて」

もう一度試みたが、駄目だつた。

酒場『ドン』の中。

若い男女の喧噪がブンブンうなつてゐる。狭い店の中では大抵三、四人偶に八人位が粗削りの木卓

の周りに押しもぐり合っている。スタンドにも目白押しに若者たちが並んでいる。その列には、宮島が講師でいつている大学の制帽の青年や宙ぶらりんの脚を大胆に振りながら酒をくんでいるY女子大生もいた。所謂アヴェックもあちこちに在るが、どの二人を見ても唾の散る勢いで議論の真最中。かと思うとだしぬけに満開の唇で笑い出して、成行なりゆきを見ていた宮島を驚かせる。へなへなの板壁にロシア語講座の宣伝ポスターが一枚ピンで留めてある。客は増す一方で、あとから来た連中は思い思いに何処かへわりこみ積み重なるようにして坐っている。成程繁子が他の空席を無視してこの隅の小さいビヤ樽の腰掛を占領したわけだ、と宮島はさつきビヤ樽に腰を落着けて得意そうに手をぶらんぶらんさせた時の紀野繁子を思い返した。くたびれたルパシカを着た青年が、山盛りのロシアサラダを運んできた。

「宮島先生。こちらはバンさん。バンタム級、からとつたんです。子供会の御大」

バンさんに限らず『ドン』で働く青年たちは全員この異国の服装だった。よく似合うから昼間もその恰好でいなさいとセツルメントの連中が勧めても「そうそ気軽に着られるかい。ダンサーのドレスに匹敵するからな」とバンさんは大真面目のキョロ眼で答えるのだ。繁子の渡すカンパをバンさんは淡泊に礼を述べていつたん受取つたが、

「あんたもどうせ只今失業中のくちだろ、無理するなよ。今は割合潤つてるんだから」

「わ、じゃ少額払い戻し願える？」

宮島に貰つたペイをそっくり渡した中から繁子は払い戻しを取つて、はしやいだ。

三月から四月にかけてはバイト学生の厄月である、繁子のように、親の方が半狂乱の受験生の家庭

教師は、試験日と同時に容赦なくお払い箱になる。結果の及落を問わず、必ずなる。工場や会社の日給仕事に年度末の追込みで傭われている学生も、仕事が出を越すと即座にクビだ。

バンさんは、左手に盆を持ち上半身反らすようにしてティブルの間をすり抜けて歩きながら、繁子が暫く御無沙汰している子供会のチビさんたちの近況をかいつまんで話した。一番年少のマツオが昨日は一日グズつて困つたと云つた。

「俺、おんぶしてカルメンまで唱つて聴かせたのにさ」

その時、ティブルの一つから澄んだ二重唱が始まつた。歌声は、波紋のようにティブルへ忽ち拡がり、店全体、混声の大合唱である。一曲終ると又誰からともなく次を始める。バンさんのアコーディオンが入つて、合唱はますますヴォリュームがでる。新しい客で店が忙しくなると、バンさんは目顔で繁子を呼んだ。

「近き将来のおやじさんつてわけだね」

アコーディオンを渡し際、バンさんは持ちまえの大声で囁いた。

「コラ、聞こえるわよ」

代つて弾きながら、繁子は今更のように、先刻宮島の横顔を見た刹那を除いては自分が宮島教授と文夫をつないで考えた事のないのに気付いた。そういえば、文夫と話す時お互いの家族に関しての話題は減多にないのだつた。

「ぐみの木」「しあわせの歌」「若者」「バイカル湖のほとり」「カチューシャ」——伴奏がつかえると「ピンチヒッター頑張れ」「頼りにしてまつせえ」など野次が飛んだ。繁子は、店の青年の一人が口

へ抛り込んでいつてくれた氷のかけらをバリバリ噛みながら、揺れている幾つもの頭越しにさつきからじつとこちらを見ている宮島へ、ランマンに微笑を抛つた。

拍手でねぎらわれて席へ戻ってきた繁子に、宮島がだしぬけに云つた。

「君、この本読んだことありますか。『遅れた子供のための教育』著者はこういう人」

酒の零れているテーブルに、細長い指の先で横文字をすらすらと描いてみせた。

「教育学の本だけど。ついこの間出たばかりだ、子供達の絵もいい色刷りで入つてゐるしあれはいい本だ」

汗びつしよりの額の前髪をはね上げ、繁子は束の間きよんとしていた。なまめかしく這つてゐる酒文字を辿つていくうちに、ふつふつ笑い出した。

「どしたの」

「先生、さつきからずつとその御本のことを考えてらしたんですか」

「うん。著者の名をなかなか思い出せなくてね。スペルをね。多分Rでよかつたと思う」

それにしても『遅れた子供』は酷い。

「皮肉ですか」

「なにが」

「だつて先生」

繁子は無性におかしかつた。何たる自惚。まるで、宮島がのべつ、自分に關する事ばかりを考えていなければいけないような口のきき方をした自分。ナンセンス。自分の向き合つて坐つてゐるこの男が